

# 心の「屏風の虎」をとらえるための精神分析からの試論 —ワークスルーにより消える名付けられた異形のもの—

浴野 雅子<sup>1)</sup>

## A Psychological Essay on Catching “Paper Tigers” in the Mind — Naming Our Goblins through Therapy Can Dissolve Them —

EKINO, Masako

### 要約

本稿では、精神分析的な心理療法を学び始める初心者セラピストが、クライアントの心的世界とつながることの重要性と難しさについて、「混沌」と「地平の融合」の考えを引きながら最初に論じた。またそのクライアントの真の苦悩の部分は、隠蔽されて容易に意識化されにくいもので、一般常識や社会規範から疎外された異境にあるものである。セラピストとの間にできた関係性という土壌で、その葛藤が表現され理解され、セラピストがそれを包んで名付けて意味づけていくこと、つまり精神分析的な心理療法過程の大切さを述べた。種々の苦悩や葛藤をワークスルーする過程で、自分のこれまで生きてきた過去の記憶や体験の中に、疎外されてきた本質的な自分が布置されて新しい自分へ統合し、変容していくものと思われる。その精神分析的な心理療法の過程を、昔話に登場する異形のもので、名づけられると消えてしまう物語と関連させて論じた。

キー・ワード：初心者セラピスト、精神分析的な心理療法、異形に名付ける昔話

### 1. はじめに

本稿では、臨床心理学や心理療法を学び専門家になりたい初心者のために、何らかの問題や悩みを持っている人、ここではクライアントと呼ぶことにするが、クライアントのこころへの理解やそのアプローチについて、精神分析理論の観点から考えていきたい。つまり、クライアントとセラピストという二者関係における意識と無意識レベルのやり取りを想定する点から記述していきたいと思う。初心者セラピストの人たち、その多くは、

いわゆる普通に学校にいき、大きな破綻もきたさず普通の世界に育った人たちであろう。そして、自分の本当の気持ちがある程度わかり、またそれを周りに話し、伝えることができる人たちではないかと思われる。また、人間関係をつくり学校や社会で生きていくことは多少のストレスが伴うとはいえ、日常の行為に過ぎないのかもしれない。

しかし、クライアントは人が怖い、人の表情が気になる、自分の本当の気持ちを伝えられない、人の言いなりになってしんどいなど、対人場面にまつわる不安や葛藤を語り、そのような状態にさいなまれている。こと細やかな場面で人の動きや

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

表情に神経を使い、自分の気持ちや動きは表現できずにとどまり、心は固まり縮こまっている状態である。

ただ、初心者の人たちは、そのような体験がなかったり、自分の過去の体験内の想像であったり、道徳的価値規範や判断基準でクライアントを理解しようとする。それはこれまで適応を通して学んできた価値や行動の基準であろうが、心理療法の世界では、それはかなり検討されて内省していかないといけない側面となる。初心者セラピストは自分自身が傷つかないように防衛的となり、それがクライアントのこちらの困難さを迎えることを難しくさせている面も多いのではないだろうか。

クライアントが自分自身の本当の気持ちや思いを見出し、それを内的にイメージとしてまとめ、そして、話すという言語の水準までに至る過程は実は大変困難な過程である。表面的にあるいは防衛的に何かを話すことはあるかもしれないが、しかし、自分を苦しめている何かが自分自身の心の中にあることを感じる、あるいは見出す、意識にのぼってくるまでに数年間要するクライアントもいる。例えば、Stern (1997/2003) は、フロイトの葛藤—防衛論に対して解離の心的事象を研究している。彼は、そういう葛藤すら感じられない「慣れ親しんだ混沌」の中にあった私でないもの、つまり解離したものはエナクトメントによってしか、理解されえないと主張している。この考えは肯首できるものであるが、初心者のための本論では葛藤—防衛論、未構成の経験、解離—エナクトメントによるセラピーといった区分については厳密に行わずに論を進めていきたい。話は戻るが、クライアントが本当の自分である実感を見出し、自分にとっての心の発露をみつけ、そこから出てくるイメージを表現し、セラピストがそれを言語化できる手助けができるような視点をここでは考えていきたいと思う。

## 2. こころに棲んでいるものをしることの難しさ 虎を兎にってしまうセラピスト

題目の「屏風の虎」は一休さんの頓智の昔話に発想を得たもので、次のような話である。将軍が一休さんに「屏風の虎をつかまえてくれ」という難題をだすと、一休さんは「捕まえることはでき

ますが、その前に屏風から虎を出してください」という返答をして、将軍が窮するといった話である。一方、心理療法での二人（クライアントとセラピスト）の間では、クライアントのこちらの中にいる虎を見出し共有することは、物理的には不可能でも空想上や言語上、つまりセラピー上はそれが可能となるのではないだろうか。そして、その過程がクライアントを変える力となっていくのではないだろうか。

なお、ここでの虎というのは、クライアントの中にずっと隠蔽されてきたクライアント自身の生きるパワーや認められなかった本能衝動、生来的資質や特性を表すとする。また、よくある竹藪の中にいる1匹の虎ではなく2匹の虎で、1匹は子虎で、もう1匹はその親虎がいるという屏風を設定したい。そして、それは静止絵でなく動画としてダイナミックに動いているものとする。そして、これは幼少時からずっとリピートされてきた動画である。

虎というと一般的には威風があり獐犷といったイメージがあると思われるが、子虎は大変気弱な落ち込み易い虎かもしれない。その子虎は親虎とどのような対虎関係にあるのだろうか。精神分析では、人は乳幼児から重要な他者との間に様々な水準のコミュニケーションのパターンが形成されてきて、自己の存在の在り様がつくられてきていると考える。つまり転移という考え、過去の子虎の出生時から親虎から与えられた、あるいは教えられた対象との関係の持ち方を精神分析理論では要として考える。セラピストはこの転移関係をどのように感知し理解するかが、今後のセラピーを方向づけていくというのが精神分析の基本的考えである。

セラピストは、心理療法を始める時に受理面接や心理検査で大まかなイメージや問題の理解、面接方針を最初に立てていく。クライアントが最初から子虎と親虎との構図や、潜在的でこれまで常に自分を苦しめてきた葛藤構図を示してくれたらよいのであるが、それはほとんど期待できないだろう。もっとも現在の問題や苦悩や苦痛については語ることができるかもしれない。事例の重篤度にもよるが、自分自身の中に子虎がいることすらわかっていないクライアントも多いからである。

虎ではなく、猪、蛇、蜘蛛、恐竜、妖怪、毛虫など何でもよいが、何かクライアントの特徴を示す、中核的な生き物がいるはずであるが、それはそう簡単には姿を現さないし、クライアントとセラピストの二人にとっても未知のものであるはずであろう。ただし、遊戯療法では玩具や多くのミニチュア、ぬいぐるみなどがクライアントの動物的部分や本質的な点を表していることが考えられる。遊戯療法の方が言語による心理面接よりもクライアントの内的世界が投影された玩具という実物があり、またそこで物語がつけられることから、クライアントの内的世界を理解し変化を促しやすいかもしれない。そして、その際にできるだけ奇怪なもの、一般的に気持ち悪いもの、嫌われているもの、異形のもののお話に着目しよう。そこには社会通念、一般常識や親の価値観から目の目を浴びず、のけ者にされてきたクライアント独自の気持ちや考え、資質、対象関係の様式が象徴的にあらわされている可能性があると考えられる。

### 3. クライアントの中の「こんとん」さん

クライアントが自分の辛さや悩み、否定的な思考や感情を語る時に、それを否定したり一般化したりせずに具体的に詳細に聞いていくことがセラピストの仕事である。良い体験、楽しい体験も勿論さくわけであるが、残酷な話、悲惨な話も含めて、感情労働である心理面接で人間同士ならではの難しいエネルギーが渦巻くであろう。

ここで、初心者はクライアントの気持ちがわからない不安、体験の特殊性が理解できないことからセラピスト自身の自分の過去経験や価値観、信念、先入観に依拠して、本来ならクライアントの心の中は虎なのに、愛らしい小さな兎をイメージするかもしれない。クライアントからうける様々な情報をステレオタイプ化して、安全なものとし、セラピストの準拠枠で、クライアントの語りたい内容やイメージを都合よく歪めて扱おうとするかもしれない。結局は、クライアントの個性や独自の体験様式に注目をしようとしなないかもしれない。初心者は、ある場面で自分が正しい、常識と思っていた考えや態度、行動をクライアントの話の展開に期待し、それとは異なる話になった時に

は、混乱や不安がでてきて、別の話に水を向けてしまうかもしれない。あるいは想像を止めてしまうかもしれない。赤の他人と出会い、その人の言うことなすことを受け入れる、話を聞く、共感するといったセラピストの態度や構えが、その初期の関係の基盤を創っていくわけであるが、実際はずいぶん難しい作業である。

日本を代表する著名な精神分析医である土居健郎(1992)は「わかる」ことについて、精神科的面接は「わかる」「わからない」をめぐる緊張を孕みながら進行すると述べ、自然に起きる「わからない」感覚だけではなく、面接においては更に判断を積極的に停止することにより、「わからない」感覚を涵養することも必要であると説いている。そして、「わかる」「わからない」といった日常語をもとに、精神疾患を区分している(土居, 1994)。わからないという感覚、安易にわかることを停止して疑問を保持したままクライアントに会うこと、違和感や異質感は、最初のアセスメントとして大切な感覚であることが考えられる。

ここで、中国の寓話を莊子(福永, 1966)から取り上げたい。南海の帝である儵(しゅく)と北海の帝である忽(こつ)は、世界の真ん中にある渾沌(こんとん)の支配する国で、めぐり逢い歓迎を受ける。この二帝はその好意への報いとして、人間にはある7つの竅(きょう：目口鼻耳の穴)が渾沌にはなかったために、あけてあげることにした。そして、渾沌は穴を毎日1個ずつあけられていくが、ついには一週間目に死んでしまった。この話にもとづく夢枕(2019)の絵本には次のような一節がある。「こん/とん/こん/とん/名前じゃないよ/まだ名前はないからなあ。/名前がないので/だれでもない。/だれでもないのに/だれでもないから/なんにでもなれる。/それが/こんとん/ということなんだなあ。」そして本の帯には「なぞめいていて、/いとおしい、/ものいわぬもの、こんとん。」と書かれている。渾沌・混沌という世界が秘めている大きな可能性を示す一方で、目鼻等をもつ二人の帝たちは、渾沌を不憫に思い、あるがままの「こんとん」に思いをはせず、好意として穴を穿つ。結局は自分の考えや合理性を押し付けた悲劇ともいえるであろう。福永(1966)は、この莊子の思想について、「儵」「忽」は東の間と

いう意味で、渾沌の国は心知の概念的認識を超え、分別の価値的偏見を忘れた実在としている。渾沌は体験するよりほか仕方ないもの、人間の合理的思惟ではとらえることのできないものであったと、解説している。

クライアントの混沌の世界を、知識のある優位者としてのセラピストが動き、好意を示したいという主観的な欲求から、闇雲に何かの作用をしようとする態度に対して、慎重に精査すべき視点を投げかけているのではないか。

対人関係精神分析論者のStern (1997/2003) は、「慣れ親しんだ混沌」という防衛としての未構成の経験は、抑圧によるものではなく、バーバルに分化した水準にまだ達しておらず、この未構成の経験は形作られるのを待ち受けているという。そしてこの混沌は、新しいものが生まれる源、想像の源となる無秩序であると述べている。また、意識せずとも私たちは夢を見るように、患者の生の物語は自然に生じてくるという。この考え方は上記の渾沌の寓話と通じるように思われる。

拙速な適応を促すために、その適応行動を指示・強化したり、その社会的に望ましい場面だけにセラピストが注目し支持し、言語化したりする。これではどんどんクライアントの心的世界を自分のやり方で染めていっていることになるだろう。このような関わり方が、意識的に起こるのではなく、自覚できない無意識的に起こってしまうところに、他者のこころへのアプローチの難しさがあるだろう。ただし、ここでは、セラピストの獲得してきた視点や個人的な体験を否定しているわけではない。何人も全く真っ白になることは不可能であるし、それらがまた大切な心理療法の大事な要因となりうる。ただ、初心者はそのような陥穽に落ちやすいことに気を付けておいた方がよいのではないだろうか。

#### 4. セラピストとクライアントとの関係をつくること

クライアントが私の中に虎がいることを何となく感じ、そのしっぽをちらつかせる時がいつくるのかは未定である。まず、何となくしんどい、何となくわからない、言語水準までにまとめられない感覚や、話しても話さなくてもよい自由がある

という余裕のある態度で、クライアントの心身の実在や尊厳を受け止める気持ちでお会いすることがスタートのように思う。

前述したように、わからないものはわからないまま受け止めること、つまり独断的に知的に構成しすぎないことが大切な時もある。問題は、クライアントに対して、拙速に知的な結論や理解を行い、セラピストの自尊心が傷つかないように自分の心の枠に疑義が生じないように、自分の理解できる範囲で目の前のクライアントの心的世界をわかったと納得してしまうことである。そして、その後のセラピーでの展開を考えず、想像や理解しようとする構えを閉じてしまうことである。

クライアントにとって、面接場面で自分を語ることは、恥ずかしいこと、罪悪感、恐ろしいことであると思う。意識するにしろ、しないにしろ、自分にみじめな思いをもたらし傷つけたもの、内外で自分を脅かしてきたもの、そこを見ていく作業がセラピーである。目の前のセラピストに話すことでまた傷つくかもしれない不安や恐れもあるであろう。では、セラピストはどのようにしてクライアントの信頼や安心感を得る存在になり、つながっていただけるのであろうか。

クライアントの幼少期の重要な他者との間に形成された関係性の持ち方、対象関係や対人特性からの影響、つまり転移からセラピストは、いろいろな気持ちや想像をもつようになる。いわゆる逆転移であるが、その扱いは精神分析では重要な技法となる。例えば、ずっと沈黙を続けるクライアントがいる。逆に相手かまわず、ずっと話し続ける場面もでてくるであろう。そのような時に、セラピストとしては混乱し、不安になるなどストレスが高くなるだろう。自分の存在を感じられなくなったり、侮蔑のような価値下げを味わったりする。自己愛が傷つき、前述のような自分を守る態度をとってしまうことになるかもしれない。あるいは、毎回の面接を楽しく待つ位、セラピストがクライアントへの陽性感情が強くなることもあるかもしれない。大事なものは、そのような自分の態度や反応を面接中に意識する、あるいは面接後に振り返り、内省し、自分の気持ちや反応、面接態度をとる理由を純粹に考え記述することであろう。Stern (2010/2014) は「相手が言おうと努め

ていることを理解する通路は、私たち自身の経験の中にある。相手を理解するためには、相手についての自分の経験を変化させなければならない」と述べている。

ただ穴をあけるほどの無理をしないように、クライアントの混沌に向き合おうとする。クライアントが葛藤を感じ、これまで心の中には言葉としてあったが、一切誰にも言えずに抑えてきたこと、あるいは、自分が考えたことも感じたこともなく記憶にすらなかったと思っていたこと、つまり解離してきたことでも、心理面接という場の設定、その二者関係という土壌の中から醸成され表現されてくるかもしれない。

つまり、クライアント自身の自分に対する真の気持ちや実際の親子関係、問題の背景が面接で徐々に明らかになっていくにつれて、クライアントの感覚や感情が自覚されて言葉になっていくであろう。あるいは治療者が、その未分化な感覚や感情を言葉にする勇気をクライアントに与え認める態度が、言語化の促進的な動きになるだろう。治療同盟といわれるものがあるが、この関係を創るには、二人の土を持ち寄り、二人でこころの畑を耕し空気を含ませて、何かを醸成させようとする土壌がまずできるかどうかであろう。クライアントは治療場面にその体をもってきてくれるかどうかであろう。そこに、こころがあり、何らかの表現をしてくれるかもしれない。今まで奥底に眠っていたもの、ばらばらであったものが、目覚め動き出す。それが何であるかを二人で考えていくことになる。

Stern (2010/2014) は対話のパートナーは、それぞれ、自分の地平の内部から、理解の過程をはじめ、対話がうまくいく時は、相手についての解釈は互いに近づき、それぞれに自分の解釈を、相手の意図について自分が新しく理解したことに合うように、繰り返し修正するという。ここに「合意」が生じ、哲学者であるGadamer (1975/1986) がいう「地平の融合」が出来上がるという。これは、臨床的解釈や共感の達成の重要な一面であり、これが起これば、人は相手の理解の枠組みの内部から相手に語り掛けることができると述べている。しかし、「多くの場合、融合がまず分析家の経験の内部で起こらねばならない。ここでの融合

とは、自分自身になじむ深く感じられる地平と、異質に感じられる自分の一部、自分の中の他者の地平との融合である」という。このレベルまでの関係性をクライアントと創るまではかなりの訓練や経験が必要であろうが、セラピーにおける対話の理想像として描くべきものの一つと思われる。

また、セラピーには言葉によるコミュニケーションのみではなく、セラピスト自身の身体の感覚や視線や表情を含めてクライアントとセラピストとの心身の動きが絶えず生じている。この相互交流の重要性は、関係性精神分析や間主観性理論、対人関係論が主張してきた考えである。つまり、あらゆる水準の相互コミュニケーション、言葉によるものよらないもの、明示的・暗示的コミュニケーション (Beebe & Lackman, 2002/2008)、多重な層のコミュニケーション、相互のやり取りがその面接の場で起こっていることを意識してほしいと思う。

要するに、クライアントからの様々な情報や面接で起こってくるセラピストの気持ちや感覚をこれまでの学習と照合しながら、理解を進めることは専門家の重要な作業である。例えば、Balint (1968/1978) は、「その分析者に特有な分析的言語と準拠枠とは、患者がどのようにして自分自身を理解するようになるのかを必然的に決定する」とし、Sandler (1992/2008) は、「分析の結果としての治療の変化は、自分自身ならびに自分自身と他者についての主観的体験とを患者が効果的に位置付けられるような、構造化され組織化された概念的感情的枠組みの提供にかなりの程度かかっている」と述べている。

昨今、多くの情報がデジタル処理され人工知能が膨大な情報を判断し統括し、生活をコントロールする場面が増えてきた。バーチャルな世界やインターネットでは、脳の部分が浮遊し刺激をうけ満足している。そのため、現代人は、より原始的な感情や身体全体を活用することが減ってきているものと思われるが、心理面接はおそらく人間しかできないことであり、アナログの仕事の一つといえるだろう。一人の人の存在に対してもう一人の生身の人間が決まった時間に存在している。大変単純な構図であるが、たとえお互いが沈黙していても、意識的にも無意識的にもそこには濃厚で

ダイナミックな心的相互交流が流れているものと思われる。

## 5. クライエントの心的表象を理解し、言葉で包み意味を与えること

長いセラピーの中で、クライエントの複雑な思いや気持ちや葛藤が表出されるようになってくる。少しずつセラピストには、そのクライエントの葛藤の特徴や対象関係への理解、対人関係のパターンが理解されてくるかもしれない。理解が深まるにつれて、セラピストのわからない不安は減っていくかもしれない。そして、苦しんだ事情が理解されてきて、セラピストが感じさせられて来た面接場面での気持ちや思いの意味も分かるようになってくるかもしれない。

Folch (1988/2000) によると、Bion (1962) は、Klein (1946) の投影同一化の考えから、「子どもが苦しい未知の感情を母親やその乳房の中に投影する過程」を描き、「子どもから投影された感情を母親がもっとなじみのある、既知の、耐えることのできる型に変えて子どもに戻すなら、それがうまく処理されたということになる」と述べている。子どもの患者は、自分のコミュニケーションを分析家が理解したと感ずる場合、その最も耐え難い感情に持ちこたえ、見つめ、考え、それについて語る分析家を取り入れるという。

また、Ogden (1986・1990/1996) は、Klein の考えとして「乳児の心的生活のマトリックスは結局は生物学的なもの」とし、「本能の構造化機能が体験としてあらわれるのは、なまの感覚データの混沌とした洪水に意味を（生物学的にあらかじめ決定されて系列にそって）付与する」と述べている。同じく、Klein 学派のHinshelwood (1997/2006) は「転移と逆転移に対する今日の見方は、包み込むという考えに依拠している」とし、ある事例について患者の「感情状態と、それに関することを言葉で形作る私の能力との関係によって、彼の中でそれが形を持つことができた」といい、これを「包み込みの瞬間」ととらえている。言葉によって心的状態や諸対象要素を言葉で包むことで、クライエントにその状態の意味を与え、今まで苦しめてきたその部分をクライエントの心の中に再構

造化していく作業になるものと思われる。

このように、名付けていくという過程の中で、やっと虎の赤子が生まれるのかもしれない。二人の関係の中から生まれてきたもの、クライエントが出してきたものを包み込むこと、つまり他の物との境界をつくり、地だったものを図としてとりあげ、それを名付けていく作業が生じてくる。名付けることとは、そこに固有の存在を与え、意味を与えることである。二人の対話の中から、ただの固有名詞だけではなく、そこに文章となり物語が編み出されて行くであろう。子虎と親虎との物語をより詳しく考えていく段階に入っていけるだろう。ようやく中核的な問題がでてきて、扱えるようになったといえるであろう。

## 6. 異形のものに名付けると、その異形が消えてしまうこと

Ogden (1986・1990/1996) は「臨床精神分析のおもな目標は個人内部 (intrapersonal) および対人的 (interpersonal) な対話から隔離された、すなわち自己疎外されたパーソナルな体験の漸進的再獲得である」とし、「疎外されたものを取り戻すうちに、被分析者は主体的で歴史的な人間存在としてより豊かに生き始める」と述べている。

また、Freud のいうエスはドイツ語で「Das Es」であるが、馬場 (2008) はこの言葉をニーチェの翻訳本で「内なる異境」と読んだ記憶があるという。そして、「自分の中にあるけど自分ではない、自分が知らない世界だという意味」とであると述べている。やはりセラピーは自己疎外されたものを異境に探しに行く作業ともいえるであろう。

ここではまた、昔話と関係づけてみる。おとぎ話で異界に棲む異形のものが、主人公の窮地を救う、あるいは何らかの特別な報酬をもたらしてくれるという昔話がある。その異形のものたちは、鬼や小人、妖精といった登場人物である。そして、その人間でない生物はあちらの世界では本来名前を持っているが、この世の主人公である人間は知らない。そして、もし、主人公がその異界の者たちの名前を知ることができれば、鬼や小人から求められた代償を主人公は実行しなくてよいという話の筋である。例えば、日本昔話の「大工と鬼六」や、グリム童話の「金をつむぐ小人」といった話



である。主人公は、彼らのお蔭でトラブルを解決したり何らかの報酬を得たりするが、その後、それに対する大きな代償を求められて悩み困惑する。この二つの物語では、結局うまい具合にその名前がわかり鬼六も小人も、人間世界からは消えてなくなり、話はハッピーエンドに終わる。

では、臨床事例の方ではどうであろうか。Segal (1973/1977) は、Kleinについての研究から、女性患者が集団墓地を掘り返す夢を報告している。その夢の内容は、葬られた人たちの中には生きていた人たちが患者を助け、すでに死亡していた人たちは無名墓地から取り出され、そして、墓に名前を刻んで、今度はちゃんと葬られる状態になるといったものであった。患者に力を貸す人々は、最初は破壊され復活させられた諸対象であるが、患者に同化し、彼女自身の自我を強めたという解釈である。また、死んだ人への名付けは、一つ一つ認識された上で、喪の対象にならねばならなかった。しかし、ちゃんとした埋葬により、魔術的に生かし続けなくてもよくなり、患者のリビドーは固着せずに自由になると述べている。ここでも魔術的な力をもつ、何かわからないものを認識し、名付けていくことで葬り去られる心的諸対象の変容過程が述べられているであろう。

各国の昔話をユング心理学の理論から分析して解説したChinen (1989/1996) は、「こぶとりじいさん」という日本の昔話をとりあげている。この話の主人公であるおじいさんは「自分自身を社会的規範と合理的思考から解放した」といい、鬼は「文明社会のルールを破るあらゆるものの象徴、いわばのびのびとした制約のない自発的な力を象徴している」と述べている。ここでも合理的思考の解放と、生き生きとした自発的な力の出会いが表現されているように思われる。このような鬼的な部分を失っているクライアントは、セラピーの中でその所在がわかるようになり、自分の気持ちの中に布置され統合されていくことで、変化していくのではないだろうか。そしてその頃には、鬼的な部分を意識する必要はなく、主体的に自律的に生きていくことができるようになるのではないだろうか。

昔話や物語でも、人間の住む現世からは名前が知られると小人や鬼といった異形のものは、消え

ていく。名前がばれて消えていく異形のものは不運ではあるが、人間様にとっては物語では大変役立つ生き物であった。人間に異界での名前を知れることは自分が幻影ではなくなり、この世にその存在が位置付けられ組み込まれてしまうことでもある。名前を与えることで、この人間世界に生きてもらってはいけないものでもある。人間界と異境界、人間とこちらの現世にきてはいけない異形たちとの明確な境界、掟のような厳しさを昔話では考えさせられるようである。

クライアントの心のどこかにはあったものの既成の世界の価値観、社会の常識、親の世界や文化からいうと、認められてこなかった本来の気質や独自の感覚がセラピーの中で認められ、名前を付けられることで、意味を持つ。それは心理療法の過程で、自分の本質で生きることができず自信がなかったクライアントの心の中に統合されていくであろう。それと同時に異形のものたちの姿かたちは消えてなくなっていくであろう。

クライアントの隠されていた本質を示す、あるいは傷を示す心の中の異物、異境にいるものは心理療法により、名前をつけられ意味を持つ存在となる。そして、その個人の心の中に位置づけられ、新しいころの変化を促し、統合されて新しい心的構造となっていく。このような変容を経て、クライアントは、主体的に自律性をもった真の新しい自分として、歩み始めるのではないだろうか。

## 文 献

- 馬場禮子 (2008) 精神分析的人格理論の基礎 岩崎学術出版社
- Balint, M. (1968) The basic fault, Therapeutic aspects of regression. (中井久夫訳 治療論から見た退行—基底欠損の精神分析 金剛出版 1978年)
- Beebe, B. & Lackmann, M.F. (1988) Infant research and adult treatment: A dyadic systems approach. Hillsdale, NJ: Analytic press. (富樫公一 (監訳) 乳児研究と大人の精神分析—共構築され続ける相互交流の理論 誠信書房 2008年)
- Bion, W.R. (1962) 'A theory of thinking', International journal of psychoanalysis,

- 43,306-10; and in second thoughts, London: Heinemann(1962); also in melanie Klein Today: Volume 1. London: Routledge (1988). (Folch, T. Eskalinen de (1988) による)
- Chinen, A.B. (1989) In the ever after fairy tales and the second half of life, Chiron Publications. (羽田詩津子訳 成熟のための心理童話(上) 早川書房 1996年)
- 土居健郎 1977 新訂版方法としての面接 医学書院
- 土居健郎 1994 「オモテとウラの精神病理」 日常語の精神医学 医学書院
- Folch, T. Eskalinen de (1988) Communication and containing in child analysis: towards terminability. Spillius, E. B. (Eds.) Melanie Klein today, volume2. The institute of psycho-analysis, London. (松木邦裕監訳 メラニー・クライン トゥデイ③ 岩崎学術出版社 2000年)
- 福永光司(1966) 莊子 内篇 新訂中国古典選第7巻 朝日新聞社
- Gadamer, H.-G. (1975) Truth and Method, trans. & ed. G. Barden & J. Cumming. New York : Seabury Press. Orig. pub. German, 1960. (轡田 収・麻生 健・三島憲一・北川東子・我田広之・大石紀一郎訳 真理と方法Ⅰ—哲学的解釈学の要綱 法政大学出版局 1986年)
- Hinshelwood, R. (1997) Burgoyne, B., Sullivan, M. (Eds.) The Klein-Lacan dialogues. Rebus Press. (新宮一成監訳 上尾真道・徳永健介・宇梶 卓編「Klein理論の転移と逆転移」 Kleinラカン ダイアローグ 誠信書房 2006年)
- Klein, M. (1946) 'Notes on some schizoid mechanisms' in developments in psychoanalysis. London: Hogarth Press (1952); also in The writings of Melanie Klein, vol.3, 1-24. London: Hogarth Press (1975). (Folch, T. Eskalinen de (1988) による)
- Ogden, Thomas H 1986・1990 The matrix of the mind, object relations and the psychoanalytic dialogue. Mark Paterson and associate, Colchester, UK. (狩野力八郎監訳 藤山直樹訳 こころのマトリックス 岩崎学術出版社 1996年)
- Sandler, J., Dare, C. & Holder, A. (1992) Sandler, J., Dreher, A.U. (revised and expanded) The patient and the analyst: The basic of the psychoanalytic process (second edition). H. Kanac (books) Ltd., London. (藤山直樹・北山修監訳 患者と分析(第2版) 誠信書房 2008年)
- Segal, H. (1973) Introduction to the work of Melanie Klein. Hogarth Press Ltd (岩崎徹也訳 メラニー・クライン 岩崎学術出版社 1977年)
- Stern, D.B. (1997) Unformulated experience: From dissociation to imagination in psychoanalysis. The analytic press, Inc., Hillsdale, New Jersey, U.S.A. (一丸藤太郎・小松貴弘監訳 精神分析における未構成の経験 誠信書房 2003年)
- Stern, D.B. (2010) Partners in thought: Working with unformulated experience, dissociation, and enactment, Taylor & Francis Groups, LLC. (一丸藤太郎監訳 小松貴弘訳 精神分析における解離とエナクトメント 創元社 2014年)
- 夢枕 獏(文)・松本大洋(絵) (2019) こんとん 偕成社